

障害の表記について

土永孝

障害の「害」の字を避けて「がい」や「碍」を使おうという動きがあることはよく知られています。「害」の字を使うと、障害者は害を与える存在であるという意味になってしまうと考えたからでしょうか、特に公的機関、自治体などで、ひらがなの「がい」の字を使うのが流行っているように思われます。しかし、文字の書き換えを疑問視する考え方もあります。

ここで障害学の考え方を思い出してみましょう。障害 (disability) は障害当事者の属性ではなく、その人の impairment (器官や身体機能の欠損・不全) を考慮しないで作られている社会がもたらしているものだということでしたね。

この考え方からすると、障害は社会の側にあるものです。害を与えているのは社会の側ということになります。もし、障害の表記を変えることによって、障害というものを無害化することはすなわち、社会を免責することにしかありません。だから書き換えるべきではないということもできます。

現に日本の障害学の学会は、「障害学会」となっています。(学会発足時、表記についての議論はありましたが、それ以降も続いています。結局「害」の字を残しています。) また、PEPNet-Japan も「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク」という日本語名であり、ウェブサイトでは「障害」という表記を使っています。

「障害」に対する意識の低い人たちがいまだに「害」の字を使っていて、意識の高い人たちがひらがな表記にしているという感じがあるとしたら、それは見当外れなのです。

もちろん、障害当事者から「障害」の表記を変えるべきだという主張も出されていますが、すべての障害者がそう主張しているわけでもありません。障がい者制度改革推進会議でも表記に関する議論がなされており (<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kaikaku/kaikaku.html>) 「障がい」表記にすべしという結論にはなりません。そもそも会議の名称はひらがなの「がい」を使っていますが、(そしてこれはおそらく政治家たちの意識が反映されているのだと思います) しかし、その中での議論や資料では「害」の字が使われています。会議の名称表記には縛られていません。

私としては、書き換えをするのが流行りのようだし、そうしたほうが安全なのかなという程度の認識で書き換えてしまうことには弊害が多いと考えています。それに、今やひらがなで「障がい」と書くのが、新しい、差別のない、望ましい表記だという意識がかなり広がってしまっているからなのか、「障害」と漢字で書くと、どうしてそのように書くのですか、という質問が飛んでくるのがよくあります。それをチャンスに、impairment と disability、障害の社会モデルを話題にして、障害についての新しい考え方を紹介することができます。もし「障がい」と書いていたら、そこを素通りされてしまうかもしれません。その意味でも、私自身「障害」という表記を続けようと思います。

「障害」「障碍」「障がい」等の表記については以下の議論をお読みください。

- 西村正樹『『障害』の表記に関する意見について』

(障がい者制度改革推進会議の作業チームが行ったヒアリングに提出されたもの)

<http://dpi.cocolog-nifty.com/website/work/syougaihyouki20100927>

- 障害の表記に関する作業チーム「『障害』の表記に関する検討結果について」

http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kaikaku/s_kaigi/k_26/pdf/s2.pdf を参照。

もう一つ、「チャレンジド」という表記を広めようとしている人たちもいます。その説明は「『チャレンジド』という言葉について～プロップ・ステーションからの提案～」
<http://www.prop.or.jp/about/challenged.html> で読むことができます。

これについては、私は障害学を学んでいる者として、さらに英語教員として、疑問を持ちます。

そもそも日本語の文脈で「チャレンジ」という言葉が使われるとき、もはやそれは英語の“challenge”とは別物と考えた方がよいのです。英語では、「さあ、問題を解いてみよう」という意味で“Let’s challenge.”と言ったりはしません。それほど日本語母語話者は“challenge”の意味・用法を誤解しています。マーク・ピーターセン『心に届く英語』岩波新書（岩波書店、1999）を読めば、その誤解のほどが明らかになります。“challenge”という英語を見て「挑戦」という（誤）訳語が真っ先に思い浮かぶようでは英語学習者としてはちょっとまずいですね。詳しくは『心に届く英語』をお読みください。

そういう、日本ではまともに理解されていない「チャレンジ」という言葉を使った「チャレンジド」という婉曲表現の説明がまともでないのは当たり前というべきでしょう。どうにかして「挑戦」という訳語を説明の中に滑り込ませなくては気が済まないようで、その結果「挑戦するという使命を神から与えられた」などという、元の英語表現にはない意味合いを捏造してしまうのです。他に「チャレンジド」という表現を安直に使う傾向への批判としては、<http://macska.org/article/261> をご覧ください。<http://macska.org/article/265> もどうぞ。